

ひがしの子

令和6年1月31日
岐阜市立岐阜東幼稚園
園長 藤井 佐由美

2023年度ソニー幼児教育支援プログラム保育実践論文 優良園受賞



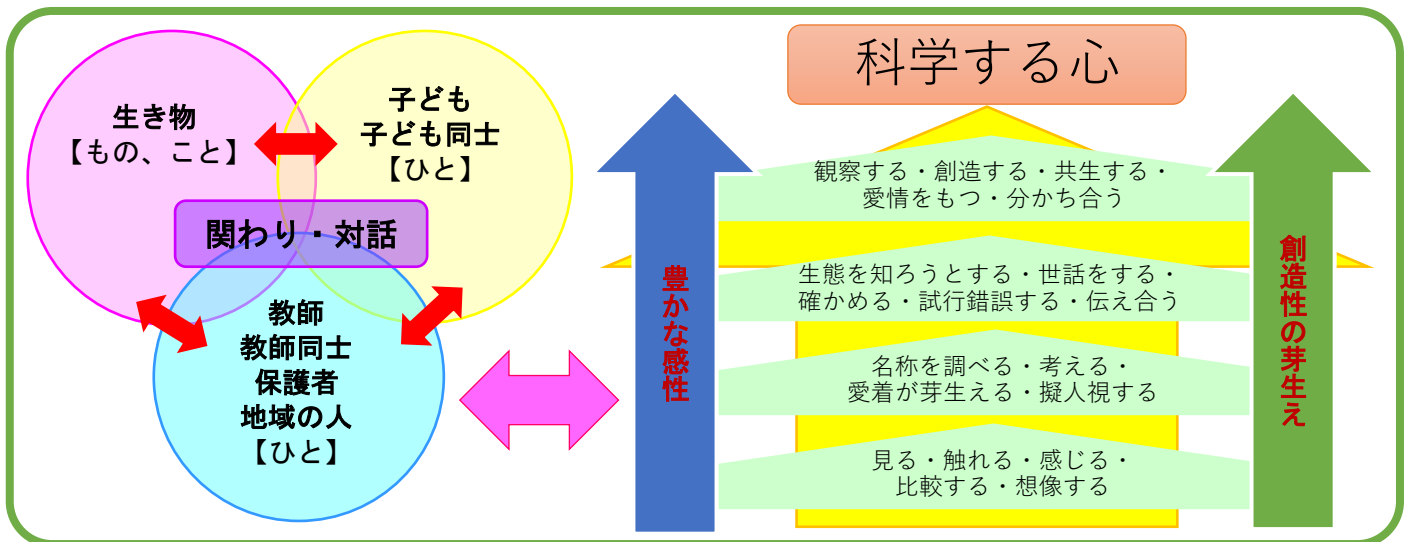
このプログラムは、公益財団法人ソニー教育財団が、未来を生きる子どもの成長を願い、「科学する心を育てる」をテーマとした乳幼児教育支援として、2002年度に開始したプログラムです。岐阜東幼稚園は「優良園」を受賞しました。2022年度は「優秀園」でしたので、一つ下がってしまいましたが、連続受賞を嬉しく思います。

今回の論文では、次のようなことを理論立てました。

子どもたちが生き物と出会い、「ものやこと」を通して、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐れなどの情動が生まれ、心が動かされ、何かを感じ取り、自分なりのイメージをもつこととなる。それを「ひと」と共有する中で、自分の気持ちや考えを自分なりの表現で伝え合うことを通して豊かな感性が磨かれる。このような「ひと」との関わり・対話により、子どもは多様な感じ方や考え方に気付き、自分と相手との感性の違いや同じを感じ取っていく。その繰り返しの過程の中で、豊かなイメージを蓄積し、新しいものを創り出そうとする力につながるのだと考える。つまり、「生き物」との豊かな出会いの中で、発達過程に応じて関わりながらその面白さや不思議さに気付き、対話を重ねて新たに知ったり、更に考えたりする。ときには「死」や「生」に遭遇して一人一人の子どもが、何かを感じ取り表現したり、「知りたい」という知的好奇心の高まりにより、調べたり、伝えたりする。子どもは、様々な出来事に遭遇する中で、新しい知識となったり、これまでの知識が体験と重なったりする瞬間に出会うことになる。「生き物との関わり」では、ときに子どもが予想もしない出来事が生まれることがある。直接体験を共有することにより、自分なりに思いを巡らせ、表現しようとする気持ちが高まり、他者と気持ちや考えを伝え合い、試行錯誤する中で、「科学する心」は育まれると考える。



こうした理論をもとに、生き物とのふれあいを通して育まれる「科学する心」のイメージ図を次のよう示しました。



この仮説を基に、日々の実践の中で、教師も子どもと共にワクワクしながら「ものやこと」との関わりを楽しんできました。それを、教師間で対話することにより、「本当はこんな風に感じていたのではないかな。」「次はこうしてみよう。」「こんな風にも考えられるよね。」など、意見を出し合い、子ども理解を深め分析したうえで、次への援助や環境の工夫を進めていきました。それにより、子どもたちは、それぞれの発達の過程において生き物との関わる中で、「見たい」「知りたい」「愛着が芽生える」「生態を知ろうとする」「試行錯誤する」「創造する」「共生する」というような段階を行き来しながら探究心や創造力を高めていきました。

さらに、家庭でも幼稚園であったことの続きを楽しんでくださり、岐阜市役所環境保全課の方々や達目洞自然を守る会の方々、地域の方々などのご協力があったおかげで、これらの実践を繰り返すことができました。

これら全てが相乗効果を生み、2年連続の受賞につながったのだと思います。関係者の皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

毎週火曜日に岐阜東幼稚園にお越しにいただいている松本 信吾先生より、コメントをいただきましたので、ご紹介します。(私が、もっと上の賞を目指していたことをご存知だったのでこのようなお言葉をかけてくださったのだと理解します。)

「(前略)(岐阜東幼稚園の) その中で暮らしている子どもたちにとっては、その子どもがそこで経験していることの価値が全てです。その意味で、岐阜東幼稚園の子どもたちは、とても濃厚な今を生きることを保障されていると思います。むしろ課題は、その近くにいる研究者が、そのことの意味を言語化し、保護者の颯に伝えていけるかだと思っています。(後略)



《2月の保育について》

【3歳児】

- 先生や友達と一緒にいろいろなごっこ遊びを楽しむ。
- 自分の身の回りのことに気づき、やってみようとする。

【4歳児】

- 自分の思いを出したり、相手の思いを聞いたりしてそれに応じようとする。
- 考えたり工夫したりしたことを、いろいろな方法で表現することを楽しむ。

【5歳児】

- クラスの共通の目的に向かって話し合い、自分なりの力を発揮し、みんなでやり遂げた満足感を味わう。
- なりたいものを調べたり描いたりしながら自分なりにこだわって創り上げる。

